

年間第十九主日

2010.8.8

ヘブライ人への手紙 11・1-2,8-12

ルカ 12・35-40

今日は年間第十九の主日です。私たちの日本の教会は、8月6日の広島原爆の日から8月15日の終戦の日までを平和旬間とし、平和を願う全ての人々と心をつなげて、私たちの国が経験した悲惨な戦争の犠牲となった無数の人々のことを思い起こし、平和への決意を新たにすべく、深い祈りをささげます。平和旬間中の今日の主日と来週の聖母被昇天の主日、私たちが捧げるこのミサが、そのような祈りの心に満たされたものとなるよう、特別な思いを込めておささげたいと思います。

明日9日には、長崎は、浦上教会での早朝からのミサに始まり、終日深い祈りに包まれます。日が落ちてからは、原爆被災者の慰霊祭が行われる平和公園の同じ敷地に長崎教区の各教会からの信者さんたちをはじめ、日本の各地や遠く海外から、この日のために長崎を訪れる多くの巡礼者の方々参集し、浦上教会までたいまつ行列が行われ、平和祈願のミサがささげられます。長崎の原爆の爆心地である、平和公園と浦上教会を結んでささげられる8月9日のこの夜のミサが、広島から長崎へと受け継がれる、今年原爆の日の全ての行事、そこでささげられる無数の人々のいのりと平和への誓い、原爆の地から世界に向けて発せられる平和アピールの全てを包み込み、最後を締めくくると、今なお真の平和への遠い途上にある、私たちの地上からの神へ向けての祈りとなります。このことには象徴的な意味があると思えます。それは、私たちが特にこの8月にささげるミサと祈りは、原爆に象徴される、私たちの国と世界の多くの国々を巻き込んだあの悲惨な戦争と、その中で理不尽にも奪われた無数の人々の尊いいのちと、今なお癒えることのない耐え難い苦しみを強いられている人々の苦しみと、そして、あれから65年を経た私たちの世界の現実と無縁のものであってよいはずがないということです。むしろ、その苦しみの中から発せられる平和を求める全ての人々の真剣な祈りと結ばれた、その祈りの全てを包含する、私たちが信じる神への祈りとならなければならないということです。

私たちがささげるミサは主イエス・キリストの十字架の死と復活を記念する祭儀です。ミサをささげるたびに、私たちは私たちの目をしっかりと主イエス・キリストの十字架に向けねばなりません。イエスの十字架は、私たちの罪が生み出す無慈悲な残酷さの理不尽な犠牲となった全ての人々の苦しみと一体となられた神が、その人々の側に立たれ、自らもそのような姿を私たちの眼前に曝すことによって、私たちの責任と頑なな心を問い詰めておられるお姿です。私たちがこ

の8月にささげるミサで、十字架のイエスの祭壇の前に身をかがめ、ささげなければならない祈りは、イエスの十字架のお姿が示している、戦争の犠牲になられた無数の人々の死から目を背け、あのような死の中から、今も私たちに向けて叫び続けている、その人々のいのちの声に耳を傾けようとして来なかったことへの反省に立った、回心の祈りでなければなりません。私たちが信じるイエス・キリストの復活が指し示す、心ある人々が新たな決意のうちに目指し、願い求める真の平和の実現は、原爆に象徴される戦争がもたらす悲惨な結末とその犠牲となった無数の人々の苦悶の死と心の底から向き合うことなしには、到来するものではありません。イエスの十字架は、それが、神が与えてくださった他者のいのちを踏みにじって来た自分たちの愚かな罪のせいであると心から認めることができた者たちにとってのみ、救いをもたらす贖罪の死となるのです。

そのような反省と深い祈りに基づいて、私たちは平和を求める全ての人々ともに、それぞれの場で自分に出来る平和の実現のための努力を呼びかけられています。今日の福音は、今の時代を生きる私たちが皆、主人の帰りを待つしもべであることを、私たちに思い起こさせようとしています。その主人こそが、私たちすべての者が待ち望んでいる真の平和をもたらすことが出来るお方です。しもべたちに求められていることは、忍耐強く主人の帰りを待って、腰に帯を締め、灯火を灯して、目を覚ましていることです。しもべたちがあるべき緊張感を持って、時の流れの中に身を処すことが出来るのは、主人の帰りが前もって告げられているからです。その主人が私たちの世界にもたらしてくださる真の平和を確信し、それがいつのことになるか分からない、私たちの今の時代の闇の中で、希望の灯火を灯し続け、押し寄せる絶望の睡魔と闘い続けて、新たな覚醒を生み出してゆくことが、私たちに課せられた、あの無残な戦争の犠牲となった方々への務めであると思います。平和の実現を求める全ての人々との共闘の中で、私たちキリスト者の役割りは、信仰に基づくこのような不屈の平和への信仰を生き抜くことであると思います。

今日の第二朗読のヘブライ人への手紙のことばをあらためて心に刻みたいと思います。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」。この8月、あの戦争の犠牲となった全ての人々のことを思い、その人々の心と一つになってわたしたちが望むべきことは、真の平和な世界の実現です。その実現が、核廃絶への道程がなお気の遠くなるほど先のことに思える現状に象徴されるように、私たちの目にはなお見えない先行きの中にあるとしても、腰の帯を締めなおし、消えそうな灯火を掻き立てて、真の平和の到来への希望を宣言し続けてゆかなければなりません。それが、戦後65年の今の時代を生きる私たちのキ

リスト者の務めだからです。

私たちが今日ここでささげるミサが、戦争の犠牲となった全ての方々と、その方々の平和を願った魂の叫びを受け継ごうとしている全ての人々の祈りと努力に結ばれたものとなるよう願って祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高